

新郷啓子



作者ハージャール・

バーリー (Hajar Bati, 一九六一年) はアルジェ生まれの新進作家で、執筆活動に入る前は、アルジェ郊外のフ

ワリー・ブーメディエン科学技術大学で数学を教えていた。これまでに発表された作品には、戯曲集『夢と飛翔 (Rêve et vol d'oiseau)』(二〇〇九年)と短編集『手遅れ (Trop tard)』(二〇一四年)がある。本作『樹皮 (Écorces)』は二〇二〇年一月にフランスとアルジェリアで同時刊行され、同年、フランスでは仏語圏の女性作家に与えられるクロズリー・デ・リラ賞の候補作品、アルジェリアではモハメド・ディブ賞の最終選考作品となった。

ハージャール・バーリーという名前はペンネームで、ハージャールはアジア・ジエバールの小説『メディーナから遠く離れて (Loin de Médina)』の主人公名、バーリーは母方の

祖母の姓から来ている。アジア・ジエバール(一九三六—二〇一五年)はアルジェリアを代表する女性作家で、本作にも彼女の作品名が小道具として使われている。小説家、映画作家である他、エジプトのフェミニスト作家ナワール・サアダーウィーの代表作『零度の女』をアラビア語からフランス語に翻訳している。

『樹皮』は二〇一六年現在、アルジェの狭いアパートに暮らす四世代家族(九十五歳の曾祖母バーヤー、祖母ファアティマ、母メリエム、そして二十三歳の青年ヌール)の今と昔の物語だ。三人の女たちそれぞれの夫は、今では他界している。登場人物が織りなす物語の背景には、フランス植民地時代、セティーフ虐殺(一九四五年。三五六ページ、注6参照)、解放戦争(一九五四—六二年)、独立(一九六二年)、そしてイスラーム原理主義勢力と国軍の間の内戦「暗黒の十年」(一九九一—九九九年)と、アルジェリアが経た歴史的出来事が展開する。けれども史実が物語の展開を導くのではなく、出来事はあくまで背景に留まったまま、その時々世相が登場人物の行動や言葉に滲んでいる描かれ方だ。曾祖母バーヤーが少女期以降の人生を語って聞かせる部分は、枠物語形式になっている。また各章の流れは時系列ではなく、時空間を大胆に行き来する構成に仕立てられている。本文学選では、第一章から第三章を訳出し

た。

青年ヌールはバーヤーの昔話に優しく耳を傾け、そこから哲学的な思索にふける、数学専攻の大学生だ。バーヤーはフランス植民地時代のアルジェリアの山村で貧しい家庭に育ち、十四歳の時に政略結婚で地方有力者の家に嫁がされる。その夫には既に妻がいたが、子を授けられなかったため、彼女は後継ぎを産むために迎えられたのだ。男子が生まれると間もなく離婚される。しかしバーヤーは計画を練り、幼子ハールーンを奪い返して、逃走。フランス人植民者の家に住み込みで働くなどして我が子を守り抜き、育てあげる。やがてアルジェリア全土で解放闘争の火が燃え上がり、青年ハールーンは解放軍に加担するが、すぐさまフランス軍に掴まって、行方不明となる。一九六二年のアルジェリア独立の翌年、バーヤーはやっとの思いで息子を見つけ出す。彼女は、それまでの動乱の中で自分に忠実に付き添った若い女ファアティマとハールーンを結婚させ、息子は商いを営み、三人でアルジェに暮らす。やがて孫ができ、さらにその後には曾孫もできて、バーヤーは家族という小さな王国に君臨する存在となる。

ヌールの父親カメルは「暗黒の十年」の余波がまだ残るアルジェリア社会で、イスラーム原理主義者たちと親しくなったことが災いし、彼らによる殺人事件の共謀の嫌疑をかけられて収

監され、十年後、刑務所で自死する。カメルは、ヌールの母親メリエムと結婚する以前に熱烈な恋愛を経験するが、家族の反対を前にこの関係は実を結ばなかった。カメルと別れる時、恋人のマイサーは妊娠していた。

その子ムナーが二十歳の時、マイサーが亡くなる。ムナーは、母親がカメルへの情念で精神を病み、母娘間の愛情を幻の父親に奪われたという執念に憑かれ、異母兄弟ヌールに報復を企てる。ヌールに恋人候補として近づき、相手を破滅に陥れる作戦だ。ところがムナーは、その過程で胸に芽生えた愛情に自らが苦悩するようになる。それが兄弟愛なのか恋愛なのかは見分けようもなく、彼女は国を出る決意をする。一方、自分が畏にかけられているとは知らないヌールはムナーの不可解な言動に悩み、理解しようと苦悶する内に、突然啓示でも受けたように、それまで見えていなかった事実を察知する。

作品のタイトルについて、ハージャール・バーリーは当初「自明の理(axiome)」としていたが、編集の段階で、本作の中で大きな位置を占めるイチジクの木、その「樹皮」に変わったそう。数字用語では「公理」とされるこのaxiomeは、ヌールとその友人仲間たちの白熱した会話に登場し、ここでは造語désaxiomatiser(非公理化する)まで生まれているように、キーワードとなっている。自明の

理、社会通念そして広義の暗黙の了解だ。本作は二十二の章で構成されているが、各章が時系列に置かれていないだけでなく、一つの章の中でも時制が往来することもあり、ややもすると展開の筋を見失いそうでもある。そうした、まるでパッチワークのような構成において、このaxiomeが、二十二枚のモチーフ布を縫い合わせる糸となっている。

例えば、バーヤーの場合、離縁されても幼子を取り戻して逃亡した彼女は、当時の女としては確かに果敢で、不文律に背いたdésaxiomatiserのタイプではある。けれども自分で家族を築き上げると、孫カメルの世間の目を無視した恋愛を破綻に導くなど、当時の社会通念を見事に体現する存在と化している。かといってハージャール・バーリーは、この世間の不文律を本作の中で不条理として据えているのではない。その不文律の重みは、三世代の登場人物たちの生き方の選択や言葉に現れてはいるが、もう一方では、その外に出ようとすると内面的な動きが垣間見える場面も少なからず挿入されている。

さらに加えて言えば、本作の作風そのものに、axiomeに挑む作者の姿勢、つまり独自の作風を築く試みも伺われる。前述したように、時系列を組み替え、また枠物語を嵌め込んだ構成にその意図が見える他、登場人物の心中の

モノローグが原作では斜体(翻訳では別フォント)で綴られている手法や、ムナーが常にノートに記す一文を随所に挿入する方法を通して、ナレーターによる語りからはみ出た登場人物の心模様を巧みに捉えている。こうしてdésaxiomatiserされた手法には、対比や陰影をともなった立体的な厚みが生まれている。

概して外国の現代小説を読む時の楽しみの一つに、その土地を訪れてそこに暮らす人々に出会うような感覚を味わえることがあるが、本書ではその味わいが濃い。登場人物もさることながら、バーヤーの分身のようなイチジクの木存在感、小道具的に挟まれている世代性を醸し出す家庭料理、マイサーの語るクラシック作曲家談、そして窓を開ければ地中海が見えるアルジェのアパートなど、筆者の個人的趣味を差し引いても魅力を湛えている。

本作について書かれた批評記事の中には、この家族の物語をアルジェリア人民の物語と見立てて、バーヤーとFLN(民族解放戦線Front de Libération Nationale)を重ね合わせる解釈もある。つまり幕開けには革命的であっても、権力の座に収まるや硬直化し、そこにしがみついた実体だ。またバーヤーは、解放闘争でフランス軍に捕えられた息子ハールーンを探し当てるまでは水を飲むことを自らに禁じるが、息子が帰還してからの彼女の水飲みは飽くことをしらな

い。このバーヤーの「水」はFLNの「欲」と読むこともできるだろう。いずれにしても、ラストでヌールがムナーと自分の間柄をまるで啓示が降りたように感知する場面には、ヌールの選択そして将来への暗示は一切なく、未来に対する限らない可能性が孕まれている。さらには、バーヤーのせん妄のような独白で埋められている、たった二ページの最終章は、バーヤーがそれまで唾棄していたムナーを思い、「あの娘に何かしてあげねば、あの娘に許してもらわねば」という台詞で終わっている。ここにもこの先、何かが変わることへの予兆が感じられる。

ハージャル・バーリーが本書を書き上げたのは、アルジェリアで「ヒラーク」と呼ばれる民主化運動が発生した二〇一九年二月二二日より前だった。しかし家族関係におけるヌールのスタンスや物語の終盤には、ヒラークの誕生を予感させるものが既にあり、作者自身もそのめぐり合わせに嬉しい驚きを表している(二〇二〇年二月二四日付Le Pointインタビューより)。

このヒラークはブーテフリーカ大統領の五選目の出馬に反対する民衆の声で始まり、高齢者から子供までが参加した前代未聞の街頭デモが全国規模で毎週金曜日に行われ、ブーテフリーカ退陣を勝ち取った。しかしヒラークは「一九六二年の独立は領土を解放したが、人民は解放されなかった」として、その後も体制そ

のものを変革し人民の解放を求める行動を続けた。ここで特筆に値する点は、参加者たちがヒラークを自分たちのためではなく子ども世代のためにと未来を射程に据えていたこと、そして膨大な数の参加者たちの間では、運動の形態を平和デモに徹するという合意が貫かれていた点だろう。デモでどれほど緊張した瞬間が生じても治安部隊との衝突を一貫して避けること、これがヒラークの死活にかかわる存在意義でもある。衝突が生じそうになると背後から「シルミヤ、シルミヤ(平和主義、非暴力)」と仲間たちの唱和が聞こえてきて各自に自制心が働き、放水車が水を放つとシャンプルーを髪につける青年たちがいるというユーモアであった。「暗黒の十年」の内戦を経たアルジェリア人民は、当時の辛い出来事を忘れ去ろうとするのではなく、その記憶の上に自分たちの新しい社会を築こうとしている。新型コロナ感染対策のために街頭デモが停止されるまでの一年余り、断食月の始まった五月にも、人々は金曜毎に街頭に繰り出し続け「金曜する(vendredi)」という新語まで生まれた。またこの間のソーシャルネットやデジタルメディアには、「アルジェリア、お前をこんなに愛したことはかつてなかった」という落書きや、警察ワゴン車の運転席に座る隊員がデモ隊の唱和に感動して目頭を押さえる映像、そしてデモ隊の中はかつて解放闘

争に命を投げ出した人々の姿があるなど、見る人の胸を熱くする写真や言葉が溢れていた。二〇二一年に入ってヒラークは、再び街頭を埋めている。

そしてハージャル・バーリー自身、このヒラークに参加し、逮捕者たちへの支援活動を行っているそうだ。作品の中で試みられている手法は、作家自身の生き方とアルジェリア人民に対する愛情に裏打ちされている。あるインタビューの中で彼女は、本書が書かれたのは「自分の必然性から」と語っている(『樹皮』を出版したBatais社のフェイスブックより)。ハージャル・バーリーにとって「ワタン(祖国)」とは、アルジェリア人民そのものではないだろうか。